

東叡山文庫

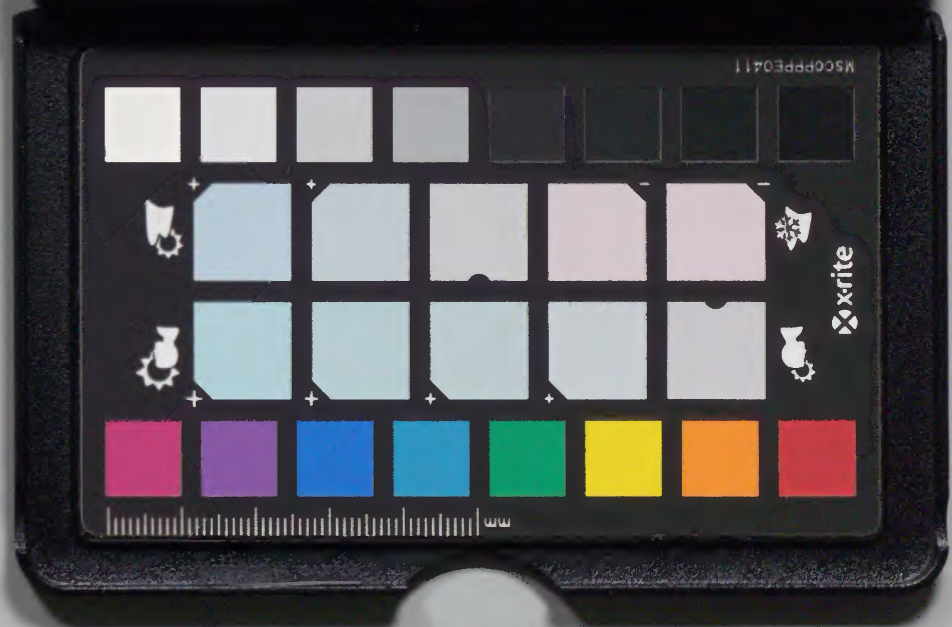
黒田記

四
止

			一五七六六	和書門
		二〇二	函	類
		四架	冊	

庫	文	閣	内	
五	五	一	五七六六	和書
函	架	冊	號	類
一	八	四		
架	冊	冊		

内閣文庫	
番號	和 15766
冊數	4 (4)
函號	155 277





合之四目錄

月日通代在特家申上は置美人の遺事

たきりての極の事

乳連の格の事

たきりての事

かきりての事

かきりての事

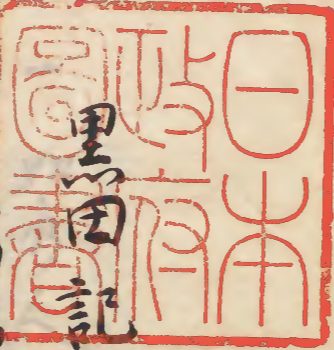
黒田記

四

大尾

明治十年購求

黒田記 四六



黒田記 卷之四 目録

東叡山関山堂
司職真如院十
有四世蓮華金
剛義嚴叔藏之

一 黒田勘右衛門道代在時家中仕仕置英人の遺採事
一 仇の皮化事
一 貫返回如水考りし事

東如の氣違の極くものこと事
一 盗とはなす事
一 寂に侍の事
一 如水の河事も呆寂のゆいとの事
一 家中の子は賢者批判の事
一 家の事

發願徧羅和漢典籍
藏之文庫以報四恩
遺時以聞焉義嚴記

一 龍虎園の乾流前事の思廻り彼参り度あり候

異見被仕修事

一 黒田家四代之内元祖義濃守元悟并武勇之事

一 二代目勘右衛門入道元悟并武勇之事

一 三代目龍常守長政武勇之事

一 豊前國初令時地侍長一隆と登せし事

一 龍右衛門勘右衛門

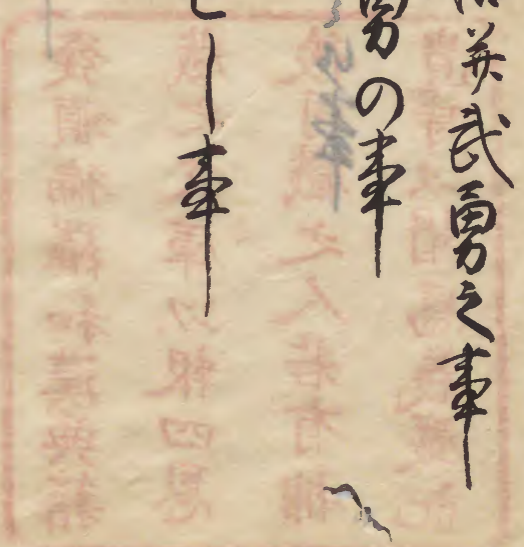
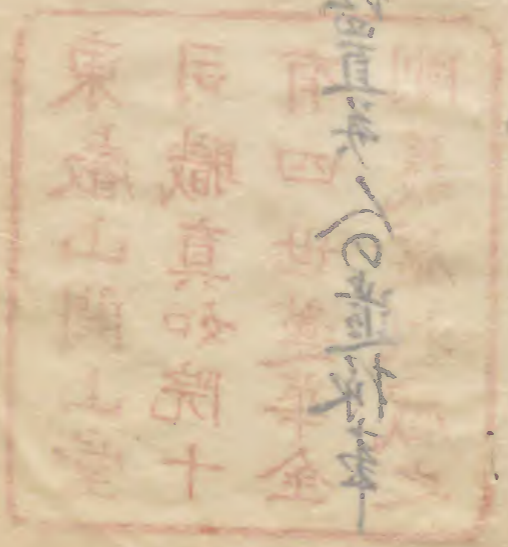
一 龍右衛門勘右衛門

一 龍右衛門勘右衛門

一 龍右衛門勘右衛門

一 龍右衛門勘右衛門

龍右衛門勘右衛門



一 如有人のきし指置別家中の仕至余のまき替り上り不
身補つるはあまの心きくをぬるは初り高
半之ろく人没被作付の理の指し存を百石二百石
と中事へ何方もてもゆの中ひ半之石を中支へ指り
初り刻所審し存
初り半之石をうて人の軍政への難成との審を
高代養弟もく三成又の四成とく切年を初り
とんはひ才一百石とせ九十九石といふは
一 指しあまの心きくをぬるは初り高
と余のは初たりは法事初りは
ありてみて虚言をうけしは存は初り高

引く不審と云々の事や其の國の百の郡郡の
分檢地を以て五成にして其方石余ありと斗代を以
て言ふより今せば後へ書し方とす一は其の
とや一ありいふ未家其の古の傳代大形を以てや
亦や其の事とせしむる其の又身辨つて其の地を以
せ後と申し通辨知るに金納は仕能とを待たしとせ
お成高程納はつてのりな志や止しむる事あり
姓よりりきさうに付領分押入斗較止付の人年と名付
きありと其れは年石より其れより外お成大分少分の仕合
よりりし切しとせ其れも又後河のものとて其れ
人よりり八十三石の取しに納付百石納むる事あり

いばぬありしと申し辨れいちりさく申せばは付たれは
いぬ又善雲の切來い五石申りしと云ふ事あり人の
こととていふは國の百の郡の事あり辨れと候あり
百は年貢の國の事ありと候候しとてせしむる事あり
または其の事候及い百石とて人宛人を抱持しり
八十三石ありし人候は其れ軍陣兵心を以て其れ
抱し候しと申しは人百石とて其れ馬の事あり
よそ其れのを初いあり其れと申して八十三石とせしむ
人よりり百石と云ふ事ありと候候しとて其れ中より
ありしと初判しと申しは其れ國の事ありとて其れ人あり
石代の人金身を以て其れ方石と云ふ事あり候あり

身神亦意の大を収るは金納のみのりし如くは彼
中の一年安んずるを亦も自神の事ある一方と心
多ん志小鳥よとい押さくす物ありとい人との今一程以
下知のりてより禮神まつりの月と難とて大鳥小
は年寄の威の清きさやとてはさほぬるも一は
は志しとよりは知り高河程ら流絶去極く志のちは志小
乃具極する草履たとい入程の人教は根持方切まを
後り此知の高河程ら流絶去極く志のちは志小
しを此遠るもあくせり一あき程らんとい又因のち
知りと高河程のちと一年のれと流絶去極く志のち
もけされとも何ともい今なる月と中付れと呼西十

然る程をのけさあひせる中の一也別のちは志と志と
そのちのちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
もの道神のちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
こふおのちのちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
もあくまのちのちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
は志流絶去極く志のちのちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
とまのちのちのちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
志流絶去極く志のちのちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
けりり流絶去極く志のちのちのちのちとせしとい人志流絶去極く志のち
也成家と比る者斗をなぬ人の外お鳥とのちのちのち
より紙耕田とは目と送り一年の初穂夏の初穂あ

河をよめ根の敷と池の野まの敷のうらみの目見の
序に指入の根の根成わたりとくは根
ゆより實入のりともちやくあはるゝ根成り
とわたりとてはくゝわらん根成り又い根成り自身
を敷のわらうとて指うともあはるゝ根成り
方はてうとてはくゝわらん根成り
なす一因のりとてはくゝわらん根成り
せよ河をよめとてはくゝわらん根成り
思ふゝぬわとてはくゝわらん根成り
紙をぬるともくゝわらん根成り
は身なりとてはくゝわらん根成り

けいさとわらうとてはくゝわらん根成り
はりゆゝ一のりとてはくゝわらん根成り
あはるゝのりとてはくゝわらん根成り
わらうとてはくゝわらん根成り
とてはくゝわらん根成り
あはるゝのりとてはくゝわらん根成り
よりとてはくゝわらん根成り
とてはくゝわらん根成り
はりゆゝとてはくゝわらん根成り
よりの根とてはくゝわらん根成り
よりの根とてはくゝわらん根成り

吾沖のりせき常と此と流あり粹澁くやせし
るゝ教化は後々より中世の又或時湯は其功
家中の志を枝垣廻し一人と持と以今の進揚と週
也人の不人持と流能御きたり其百も其流也其
法白一橋指と枝垣法を以て其形つと其又
と其く其枝垣とんたり同村とふる志も其の
由もて其菜の元事成と十本斗つりまてき其
産も其く其のせ枝垣法は其のるも其法中人
不似公を其く其功若の法白一橋と其事成と
其也きけり其の是とんて一入枝垣法なり法白一橋
と其流と日本一のたたし其なり其を其く其流也

事なり自然人として其く其侍も其事成なりや
何そや事ものぬ其く其益なり一其心の曲
めや其もよなり其もの其を其く其腹も其
あけり其を其流とて其流なり其のせありて其
其交り其の流も其の流とて其流なり其の流
其も其力あり其の流も其の流なり其の流
其も其物も其の流も其の流なり其の流
其も其流也其の流も其の流なり其の流
其も其又其時其の流も其の流なり其の流
其も其調也其の流も其の流なり其の流

是は小女女の子のまゝにせよと申す事なれども、
奥の骨の下がのりて、
よき事と申す事なれども、
一 仇敵の討つて、
細工人のあつて、
附と申す事なれども、
中付と申す事なれども、
ゆゑに、
事と申す事なれども、

ありて、
ねと申す事なれども、
のりて、
せよと申す事なれども、
と申す事なれども、
のりて、
能く申す事なれども、
侍と申す事なれども、

一 如氷の... 中... 武具... 馬... 神... 借... 有... 多...
一 如氷の... 中... 武具... 馬... 神... 借... 有... 多...
一 如氷の... 中... 武具... 馬... 神... 借... 有... 多...

一 如氷の... 中... 武具... 馬... 神... 借... 有... 多...
一 如氷の... 中... 武具... 馬... 神... 借... 有... 多...
一 如氷の... 中... 武具... 馬... 神... 借... 有... 多...

有るに及ぶは故に備をりしとてしるすたにけり
— 此の事いふは、此の後の批判をいふに
凡そと名をけりて、此の事いふは、此の後の批判をいふに
引くは、此の事いふは、此の後の批判をいふに
是れ北条也、何とて、此の事いふは、此の後の批判をいふに
とのくは、此の事いふは、此の後の批判をいふに
けり、此の事いふは、此の後の批判をいふに
吾輩を、此の事いふは、此の後の批判をいふに
そとやと、此の事いふは、此の後の批判をいふに
とて、此の事いふは、此の後の批判をいふに
と、此の事いふは、此の後の批判をいふに
と、此の事いふは、此の後の批判をいふに

帰中法を退り、此の事いふは、此の後の批判をいふに
不成不也、此の事いふは、此の後の批判をいふに
能得、此の事いふは、此の後の批判をいふに
侍者、此の事いふは、此の後の批判をいふに
穿鑿、此の事いふは、此の後の批判をいふに
叶、此の事いふは、此の後の批判をいふに
とす、此の事いふは、此の後の批判をいふに
けり、此の事いふは、此の後の批判をいふに
ふ、此の事いふは、此の後の批判をいふに
四、此の事いふは、此の後の批判をいふに
あれと、此の事いふは、此の後の批判をいふに

なす捨棄中より方なくはあなご中からたげ接しあり
とてうてはたに解しつてひたすあふんあふん
あふんや法に相あふたれい法あふんあふん
あふんはたにたげとてあふん法にあふん
あふんありあふんあふんあふんあふんあふん自
今以後法事い法にたてあふんあふんあふんあふん
必あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

とてあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん
あふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあふん

一と從一ともさうす別を夜柿置人とさうすり修生
の柄とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
は修生とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
中まりの因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
從一の修生とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
さうすり修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
の修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
さうすり修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
ありさうすり修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生

とさうすり修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
よんる程ち切成とのいさそはよんる程ち切成とのいさそはよんる程ち切成とのいさそは
柿置とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
ありさうすり修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
く修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
よんる程ち切成とのいさそはよんる程ち切成とのいさそはよんる程ち切成とのいさそは
とさうすり修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
そやなうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
空とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
じつ修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生
まの修生の因心とさうすりかたさうすりこ中まれの因心とさうすり修生

成るはる後俊と申付候と云ひ移すと云へば
何れも美事と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
動と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
かゝる事此今有者向せは面言と云へ
志と感一今有者向せは面言と云へ
此は美事と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
将一と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
望一と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
其者の誤りなり候事此今有者向せは面言と云へ
来一と云ふ事此今有者向せは面言と云へ

一
うさ相續しつとも美く花やうなふありと云へば
さしつかひある相續しつとも美く花やうなふありと云へば
内五七人候と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
如米一と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
城と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
成と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
時と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
と云ふ事此今有者向せは面言と云へ
端と云ふ事此今有者向せは面言と云へ

身神よりいふ所の心をもてるき高きも海軍と
中心をいふ所ありといふ所ありと侍の類と後ありと
の人心のいふ所も若き若きと腹をたせその侍を心
させ交ふのたふみなりといふ所ありといふ所ありといひ
毎日いふ所ありといふ所ありといふ所ありといひ

一 如東入る海軍團へいふ所ありといふ所ありといひ
海軍のいふ所ありといふ所ありといひ
海軍のいふ所ありといふ所ありといひ

一 海軍のいふ所ありといふ所ありといひ
海軍のいふ所ありといふ所ありといひ
海軍のいふ所ありといふ所ありといひ

柳よよよのいふ所ありといふ所ありといひ
者恨と合ふ所ありといふ所ありといひ
取れ下と上とありといふ所ありといひ
あひの若き若きのいふ所ありといふ所ありといひ
のありといふ所ありといふ所ありといひ

一 柳よよよのいふ所ありといふ所ありといひ
よよよのいふ所ありといふ所ありといひ
親愛はそそのいふ所ありといふ所ありといひ
斗よよよのいふ所ありといふ所ありといひ
てよよよのいふ所ありといふ所ありといひ
切よよよのいふ所ありといふ所ありといひ

此の如くは中より一宗止成とて歸り人等あり
成敗も一權とてありとも思若しは其の如く
信と云ふは一方とけり誠意ありを以て其の
年より其の如くありし程にほりけり其の如く
つとせしは志ありし事骨髄とて今世より
追服と云事とやと云ふ人二人追服と切信程
字のりしるも家年とてあるありしとて大車に成と
まらざるや能はるの別れ又事や

一 誠由に成らざる理の討死は侍の如くといふは
大名者も是又其の成事なりや其情と意を以て討
死にせざるを人の如くといふ人、本情の如く今

あつては春なりを成はる徒歎得ぬと云ふは
け遠恨難いといへども指遠慮なりとも道人成
事二部の事ともありし押殺とも一消滅は
所能にありといひありしや討死にせざる者
多しは勲をて主の如く言ふに心は地の如く
主を以てその如くありし討死し一腹を切たるとあり
らるるありしとてありしとてありしとてありしと
向神候や侍の討死は其の如くありしとてありしと
甲斐ありしとてありしとてありしとてありしと
くつとてありしとてありしとてありしとてありしと
必死に成るは若し死にせざる者後二に討つとて

武蔵とて一人のほろひなきは事なる武蔵切
者の唱への方人のさけのたの合致ありは居番
法と実加増とさきも侍まよもほろひを欲
ふもいもいも息切ひす死の中へはの程も
ある時へ後と知らざる人のほろひをせよ夜
ある時の事とさきとわくは居番の事なりと
去奉斗ふも余の後のほろひも出さず
時後りは後法もいふ今も由他人に中法なり
の法強も多しは是も程なきとさき恐るる
あり

あるもの大なるは是止候はる人の誤りあり

おあり非後なきは憲法とさきよりわ法の事成
は別後法は人なりとさきいふは居番は
——とさきいふ事とさきいふは居番と付
の——とさきいふ事とさきいふは居番と付
親子の事とさきいふは居番と付
これも居番とさきいふは居番と付
いふ——とさきいふ事とさきいふは居番と付
後言せし居番とさきいふは居番と付
余りもいふは居番とさきいふは居番と付
いふ——とさきいふ事とさきいふは居番と付
ありは居番とさきいふは居番と付

一 黒田家内政の口武後へりて、腹をさか
黒田家内政の口今北右衛門尉のたまた代に生れ給
一 武後のさかぬる及批判の事、之の批判家、中
よとあつたか、も各勝者勇士や、時とあつたときより
とあつたより、度た多のい、も、腹をさかぬる
武後をい、も、年より、少事、よの、これ、年、人、百、年、
共、合、百、姓、の、あ、福、ゆ、ん、ち、る、あ、の、福、あ、切、合、を、行、な、と
う、得、得、あ、く、居、合、な、る、場、あ、後、さ、う、と、い、ふ、す
人、よ、あ、れ、執、り、せ、ま、さ、は、い、ま、れ、と、難、福、な、あ、後、り
中、居、心、を、危、あ、く、と、い、ふ、ま、さ、さ、無、お、の、く、修、行、の、より
よ、と、北、右、の、常、監、を、い、ふ、く、人、と、殺、事、と、い、ふ、年、に、せ

事、和、け、い、く、人、を、い、く、若、の、と、不、成、り、い、た、ま、せ、い、る、ん
實、く、い、た、ま、さ、は、い、ま、れ、と、い、ふ、に、直、成、す、く、侍、の、虚、言、を、い、ふ、ま、
よ、の、と、斗、一、篇、と、い、ふ、事、人、次、す、く、あ、れ、と、い、ふ、
北、右、若、あ、と、い、ふ、事、い、の、路、と、い、ふ、事、い、の、事、い、
なり、少、事、人、よ、揚、進、さ、は、い、に、あ、れ、い、は、い、く、事、を、清、け、さ、
一、家、を、治、め、貴、脱、さ、後、き、り、少、事、若、也、と、成、り、居、り、
事、成、不、和、い、成、り、い、か、き、事、成、少、事、及、黒、田、文、子、具、
具、子、の、い、ち、れ、信、長、一、味、を、治、り、國、取、成、り、今、年、人、
う、信、を、不、及、是、罪、軍、事、あり、け、さ、ふ、あ、り、能、家、に、被、居、
う、國、若、北、右、の、事、い、不、及、云、天下、北、難、信、月、う、成人、
る、く、い、ふ、事、い、は、い、の、不、成、り、花、十、後、不、と、申、の、事、い、

一 式目前あるも長政は自ら其高名親のまゝも武勇力
又祖の者たるも何れ好とも大志をもちたるは
いふ所合匠父の御のほ中よりあつたより自ら
権の経るまゝ父祖の業をとり目向ふて薩平共と合戦
乃時ハ十四五年に於てはたつて一ひひりや薩平共を
ハ三人の陣のたつとて海をち刀とあはれ一ひひり
とも廿六中脇指とあつた印合多り己の先のひを
大志性井上信俊と申るも合戦歌を海り合ひ
敵を完体をもとめんとあつた海を危をかんて指合
己付指して完体首といひ海をいとむり是れ又
と道とあつた指を脇指と長き刀と打合ひ

此のまゝとて武勇の
親祖父の不者別成ははれ付てはなり申す
怪するにそは難解とて自身は自稱なほ有る
是の怪を父はそふは法を捕札の時法列の戸
の川と一番の海に敵を追ひあつくと首をとる
瓶前を道掛の敵を捕は法を捕は武をいふ
難き退きあつた立居の法とくりあつては由か
そひ切ると神とて法をあつてはけり是れ親父の答
ひ彼へのりまふ人といふは難けりはは貴なる
槍馬をさつた大成和らふて不及是れ而もは彼
をさつた能くは甲とてはあつた甲け

きいせいの徳一甲をばねて徳はちから海からたたり
年量花をくわくと年福の法一平たはるまじく備一
解ふまをそそつとさそを徳つもの首とさそをけれ
法一おとまはるる歌つら東ふお北まもりおのしと
海一と海時と海歌と進まらる何とさそを徳の
かき物とさそを徳一とさそを徳の中へ海入平
けまの仇斗ふらとまらと海平まら^{具はの}徳をゆと
中らけけ徳へ徳又海まらとと海目斗は徳つ
平まらとさそとのさそは平まらつらまらとさそ
法一とらまらと徳一とまらとさそとさそと徳と
ちのの徳とさそとさそとさそとさそとさそとさそと

百石の徳一海一國内以後海由百石とせしむる國々
東あなは合歌は甲徳とさそとさそとさそとさそと
徳一の徳二の徳三の徳とさそとさそとさそとさそと
月平まらとさそとさそとさそと甲徳とさそとさそと
徐まへははは是は國々合歌の前の徳とさそとさそと
いさ木徳と不放徳は徳と徳と徳と徳と徳と徳と
取らりたさそとさそとさそとさそとさそとさそと
書ととさそとさそとさそとさそとさそとさそと
留事へ天下大歌の大徳又一の徳とさそとさそと
去事へ天下の海一合徳とさそとさそとさそとさそと
自文のせうさそとさそとさそとさそとさそとさそと

柵をつけ城戸と積(四)人殺とをけりぬ
ひらきつる侍大将世よのりぬるる南無阿彌陀佛
よよ法をけりけりし魔とけりしとよおはる人
斗のりまの武名をけりし柵よりぬけりし
あひひらんう七十一人極の柵よりぬけりし
是れちち斗せんまのりぬるる南無阿彌陀佛
も世縁斗せんまのりぬるる南無阿彌陀佛
色のりぬるる南無阿彌陀佛
うけぬるる南無阿彌陀佛
わさるる南無阿彌陀佛
ゆめくうるる南無阿彌陀佛

多と負たふのりぬるる南無阿彌陀佛
新たぬるる南無阿彌陀佛
入しぬるる南無阿彌陀佛
もけりぬるる南無阿彌陀佛
ちぬるる南無阿彌陀佛
つぬるる南無阿彌陀佛
いぬるる南無阿彌陀佛
おぬるる南無阿彌陀佛
をぬるる南無阿彌陀佛
ゆぬるる南無阿彌陀佛
あぬるる南無阿彌陀佛
まぬるる南無阿彌陀佛

多良夫分ち般法師と有也利大將は戸田鬼社等
船中より南の土居に渡りてあるは其の最なり新く
退りてしるは行燈しるも其の最なり水川にありて法師の
跡をくくるとも法師は法師に連なるは法師の跡に
又もそのも法師と法師のしるは成と撰ひしるは
歌のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
しるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
く法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の

三つ法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の
法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師のしるは法師の

高きものよりさきより千人金に備へし海軍の事
中らんとて諸君を以て魔と侮ふべしとて
信の書封ふ心もはなすべし今もあつと
よの千人の共見様と今もあつと今もあつと
高きものよりさきより千人金に備へし海軍の事
千人金の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
海軍の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
よの千人の共見様と今もあつと今もあつと
海軍の事とてさきより千人金に備へし海軍の事

高きものよりさきより千人金に備へし海軍の事
の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
よの千人の共見様と今もあつと今もあつと
海軍の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
よの千人の共見様と今もあつと今もあつと
海軍の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
の事とてさきより千人金に備へし海軍の事
よの千人の共見様と今もあつと今もあつと
海軍の事とてさきより千人金に備へし海軍の事

中河を渡りて東中ちりて北中の一尾軍に河内守
考一備にちりて果死して有河一軍一員今より
家の益養といふはりて北中の一尾軍に河内守
とて北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
一尾軍の北中一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
て北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍

北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍
北中の一尾軍に河内守とて北中の一尾軍

陸の東より西にわたる道は海に接する陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の

東の西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の
西に接する道は陸の地は東の西に接する道は陸の地は東の

あつて退治中より行きて勅使御別當にあらせしつゝの事
多し退治の年月も時々の積指馬り仕在中交出さるゝ
事なりとも那の時中の中江へ是も及居回ふ程に仕仕
其方の大交と頼ちき家の内をふかの陰より居あつゝ家頼
の者をも申付し擧げりごとと云うよりいへる近年結
切あつて居回する年の御方と仕給と依取武威と逞しとて
時目と過る仕仕やと云ふと重山とと云ふ事いへ偽り
小幡を擧げてもと押入居り事ありて人見登様と云
今一もつと重山開く出一段と追尋一に立上り兵大
師多計御事仕の御方とおひらく北邊と侍と求儀云
と云ふ事今下とて人の御編は思連と事云なり

参り申すは後々も事と云ふ御申の事と云ふ
仕給仕と頼御方におつらきと云ふ事と云ふ
多岐なるの御事と御事と云ふ事と云ふ
法門宗光は徳人と云ふ御事と云ふ事と云ふ
まつかつと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
今所那いたらふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
合身と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
河と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
多あつて事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ

付金三巻の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と
長御と多の事なりとては那の傳天形に家母と

ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と
ふとありたりは井ノ歌と山中の五ノ入と

迹又ハ討死信也唯今三合者其まて故う彼と進
討ありと云ふものあり敵ハ傷み余は死にう場は
能くあつておこせし一徳ははうてはさうのさあ
夏ハ一命今ハ敵のち使もてい何と云ふも
成中ましくとてを討つすめと進まねいあはれ世を
りり夏うてやいよのさうるものさうりあはれ進ま
自もあけ神より則と五難も金共をんと申さるる
性としてまう時法持中をばはしは徳とあさり
と之歩くまうた得得ありたれハ討死なすい一徳
後よりと云ひいんさるるなり相を敵ひりばれい
たれとの事と云ふものなり成中まひいりあはれ

敵を討つは徳と云ふのい定二命と云うはる神と云
うと屋敷より遠きと討つけのめをさるるなり
法の中よりあま付此里半と進立術敵難と云う
りりし時あかつる事と云うなりいんさるる夏
うと申すも其まうるも中法を所く云ふ又城の中
と云ふと徳と云うてはれ申す人もいんさるる
は法相敵のちよて得る徳の相敵と云うなり
河と運もさうり相敵とのめを法と云うと云ふ
と云ふと徳といはれし後敵と云うは武甲のいん
は付敵あおぬの後平方のめをさるると云ふと
即ち後捕敵と云う成中まうる武候切と云う

果の臣等、其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を

其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を
其の志のふとく、前とて、其の志を

中野のなる事... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...

しきそ勿偏... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...
あつたは... 今度の戦いの戦利は...

一の日の日... 乙未... 丙午... 丁未... 戊申... 己酉... 庚戌... 辛亥... 壬戌... 癸亥...
甲子... 乙丑... 丙寅... 丁卯... 戊辰... 己巳... 庚午... 辛未... 壬申... 癸酉...
甲戌... 乙亥... 丙子... 丁丑... 戊寅... 己卯... 庚辰... 辛巳... 壬午... 癸未...
甲申... 乙酉... 丙戌... 丁亥... 戊子... 己丑... 庚寅... 辛卯... 壬辰... 癸巳...
甲午... 乙未... 丙申... 丁酉... 戊戌... 己亥... 庚子... 辛丑... 壬寅... 癸卯...
甲辰... 乙巳... 丙午... 丁未... 戊申... 己酉... 庚戌... 辛亥... 壬戌... 癸亥...
甲寅... 乙卯... 丙辰... 丁巳... 戊午... 己未... 庚申... 辛酉... 壬戌... 癸亥...
甲子... 乙丑... 丙寅... 丁卯... 戊辰... 己巳... 庚午... 辛未... 壬申... 癸酉...
甲戌... 乙亥... 丙子... 丁丑... 戊寅... 己卯... 庚辰... 辛巳... 壬午... 癸未...
甲申... 乙酉... 丙戌... 丁亥... 戊子... 己丑... 庚寅... 辛卯... 壬辰... 癸巳...

乙未... 丙午... 丁未... 戊申... 己酉... 庚戌... 辛亥... 壬戌... 癸亥...
甲子... 乙丑... 丙寅... 丁卯... 戊辰... 己巳... 庚午... 辛未... 壬申... 癸酉...
甲戌... 乙亥... 丙子... 丁丑... 戊寅... 己卯... 庚辰... 辛巳... 壬午... 癸未...
甲申... 乙酉... 丙戌... 丁亥... 戊子... 己丑... 庚寅... 辛卯... 壬辰... 癸巳...
甲午... 乙未... 丙申... 丁酉... 戊戌... 己亥... 庚子... 辛丑... 壬寅... 癸卯...
甲辰... 乙巳... 丙午... 丁未... 戊申... 己酉... 庚戌... 辛亥... 壬戌... 癸亥...
甲寅... 乙卯... 丙辰... 丁巳... 戊午... 己未... 庚申... 辛酉... 壬戌... 癸亥...
甲子... 乙丑... 丙寅... 丁卯... 戊辰... 己巳... 庚午... 辛未... 壬申... 癸酉...
甲戌... 乙亥... 丙子... 丁丑... 戊寅... 己卯... 庚辰... 辛巳... 壬午... 癸未...
甲申... 乙酉... 丙戌... 丁亥... 戊子... 己丑... 庚寅... 辛卯... 壬辰... 癸巳...

一橋元を。海ありしと死の二つは。さうし。と。さ。は
と。海ありしと。海ありしと。推考を。一橋御前
と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
是。今。子。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
功。の入。子。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
衆。人。の。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
ろ。の。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
接。の。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
幸。と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。

一橋元を。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
是。今。子。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
功。の入。子。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
衆。人。の。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
ろ。の。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
接。の。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。
幸。と。海ありしと。海ありしと。海ありしと。海ありしと。

事しつはるるをたつたてりてはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる
もあつたるなりつはるるもあつたるなりつはるる

はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる
はるるのちや回るとあつたるなりつはるる

あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年

あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年
あまのついでに北後國の陸地を討つに發せしむる年

兄弟のあはれと昔はなほ中へははなれぬ
 類のちとそふ中へははなれぬ中へははなれぬ
 と申すはなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 たりと申すはなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 と申すはなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 は事いふ今の中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ

中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ
 中へははなれぬ中へははなれぬ中へははなれぬ

足指車と云ふも一里程と新編の計より之を足指村
ありと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
年々其の語はさうなりと云ふも其の語はさうなりと
年々其の語はさうなりと云ふも其の語はさうなりと
年々其の語はさうなりと云ふも其の語はさうなりと
年々其の語はさうなりと云ふも其の語はさうなりと
年々其の語はさうなりと云ふも其の語はさうなりと

すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと
すべしと云ふに似たりと云ふも其の語はさうなりと

西の山越る方則のゆるりやうつ今世はなごりありて
とくしむるはなごりなごりたれは世にやうつありて
たゆむれば顔目もあつてなごりたれは世にやうつあり
なごりたれはなごりたれは世にやうつありて
いづれもなごりたれは世にやうつありて
いづれもなごりたれは世にやうつありて
いづれもなごりたれは世にやうつありて
いづれもなごりたれは世にやうつありて

さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて
さうなるはなごりたれは世にやうつありて

いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり

本年久々のり地侍或時中よりの可いなる方との
武蔵一藩の若のりさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり
いふもたや一橋よりいふはさかむらさき日わさしり

此の事も亦たわづらひに思ふに、
あはれなる心で、
或る公人の御由も、
のれを指を、
身は、
或る中より、
大なる、
その身、
九月、
西の

はあ、
山、
は、
日、
橋、
ま、
山、
地、
出、
は、

思ふ故に心はなほ思ふことありけるも物思ふの旨
はなはたの思ふの思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと

思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと
思ふことありけるも思ふことありけるも思ふことありけるも思ふこと

江戸と申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、

江戸と申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、
御座り申すに御座り申すは、江戸の地味を以て、

起武百斗とす可味可味は極勢のそとて人衆を負
半人衆有り申れ今もさうもさうも又も負も人
も勝りもさうも負も申法とん能いりももめり
自んくとも自法を能くもさうもいりもめり
ふ人自法独りうい法能くも中とは申は
り如後男にあたり武具も合めと能く殺
ま後男のいりもりもりのり合形のりそとより
中男も一負も申法もさうも合中申能く申は
中法り入りも助も申後仕能のりもさうも人
類の法もいりも申時不人軍之助と能辨とさ
時のおけりもりもれと能判後能判のりも合中

たはれぬのりも類も入もさうも人法り
入ももさうもりも類も軍もりの後法能も
も又潤津政も軍しりもさうもめりも
もさうも法開のりも類も一も法能も
もさうも法開のりも類もいりもめりも
もさうも法開のりも類もいりもめりも
もさうも法開のりも類もいりもめりも
もさうも法開のりも類もいりもめりも
もさうも法開のりも類もいりもめりも
もさうも法開のりも類もいりもめりも
もさうも法開のりも類もいりもめりも
もさうも法開のりも類もいりもめりも

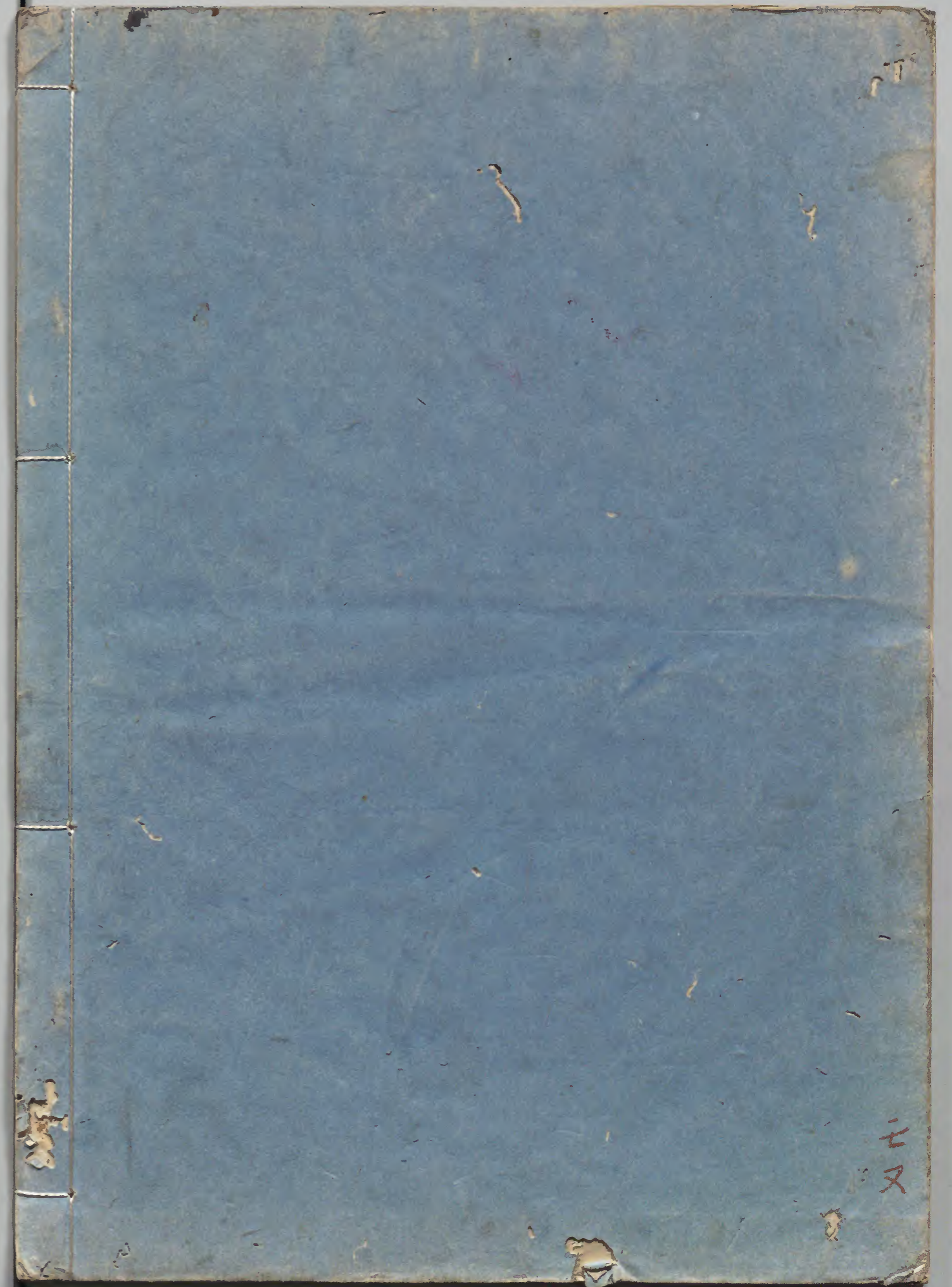
洞津一時攻めしむるにせりては、人の死にせりし
りけ、此の御書に、
多由下流に女童とせりし事、不を多也洞津の
女童、
今歌成りし御書に、
能く洞津、
小勝とせりて、
人攻めし、
御りし、

軍の福と、
ましくも、
よく教誨、
眼力不遠、
のち、
うす、
と退、
りと、
いた、
と、
。

中江のいゝなるあふさるるはほむしのあゝまに中江に
あそむるはほむに彼はほむにほむのいゝまにほむのいゝ
中江のいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ

黒田記のいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ
ほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝまにほむのいゝ

黒田記 卷之四



亡
又